往生記　書下文

〈凡　例〉

（一）本訓読は、林彦明校訂『昭和新訂　三巻七書　全』（第四版、昭和十八年、総本山専修道場）を底本とした。

（二）漢字表記は、平易を旨とし可能なものは常用漢字に改めた。

（三）本訓読中、改行は内容に応じて適宜施した。

往生記

難遂往生機　これに就いて その十三有り

源空撰

一には、常に勇猛精進にして、念仏の功、相い積むといえども、憍慢の心に依って臨終の時、魔の為に便りを得せ令むる人。

二には、道心も有り、誠心も有り、日夜念仏その徳、他に勝れたるが故に、諸人これに帰依す。然る間、布施において貪を生ずる人。

三には、念仏の功、有りといえども、信施を厭はざるが故に、その罪漸々に相い重なり最後に正念に住し難き人。

四には、厭離の心強しといえども、欣求の思いはなはだ弱き人。

五には、信心深からずして存るがごとく亡がごとき人。

六には、信心一ならずして決定せざる人。

七には、信心相続せずして間断有る人。

八には、常に疑煩悩を生ずる人。
九には、好んで雑縁に近ずく人。
十には、たとい理を得るといえども、偏執改め難き人。
十一には、平生に極楽を欣求すといえども、内心不調なるに由って、臨終に狂乱する人。
十二には、臨終の時、忽然として悪知識に遇える人。
十三には、往生浄土の教えを見て、横に僻見に住する人。

往生の障りに四在り
疑心、懈怠、自力、高慢。

往生の機に四在り
信心、精進、他力、卑下。

種種念仏往生の機

第一には、智行兼備念仏往生の機　これに就いてその三有り。
一には、顕教を修行してならびに念仏往生する人。

二には、密教を修行してならびに念仏往生する人。
三には、本、所修の顕密の行を改めて念仏に帰して往生する人。

第二には、義解念仏往生の人　これに就いて その三有り

一には、偏に善導和尚の解釈を以て、指南と為して、雑行を捨てて正行に帰し、雑修を嫌い専修を守り、義理を失わざる者、弥陀本願の旨を信知して、念仏して往生する人。

二には、善導一師に限らず、曇鸞、道綽、懐感、迦才等の和漢両朝の人師等の解釈の中、心の所引に任せ、信の所発に随って、念仏して往生する人。

三には、教他を以て往生の業と為して、念仏して往生する人。

第三には、持戒念仏往生の機　これに就いて その二有り。

一には、勇猛強盛に戒を持ち、念仏して往生する人。

二には、持戒を本とすといえども、その身勇進に堪へざるが故に、行儀緩緩としてしかも破戒の罪を恐れて、常に懺悔して念仏して往生する人は、なお持戒を具する機に摂すべきなり。

第四には、破戒念仏往生の機　これに就いて その二有り。

一には、戒をば破るべからず、罪をば造るべからずと、心はこの思いに住すといえ

ども、身その器に堪えざるの故に、恐れながらこれを犯し、歎きながらこれを造る、深くこの事を悲しんで他無く余無し。称名の功用を仰いで、本願の威力を憑んで、常恒に変せずして、念仏して往生する人。

二には、持戒持律は分に非ず有に非ず、かくのごとき衆生の為に、法蔵比丘の五劫思惟して発したまう所の念仏往生の本願なり。全く我が身の善悪を顧みるべからず。ただ称名を以て、来迎に預らんと欲し、本願力を以て往生を欲するの人。

第五には、愚鈍念仏往生の機　これに就いてその十六有り。

一には、善知識の教えを聞いて、一向に信を生じ威儀法則を弁えず、行住坐臥を論ぜずして、日夜に念仏して、すなわち久しくその功を積で往生する人。

二には、聖教を学せずといえども、天性正直にして、自然に慈悲有って人を憐れんで、念仏して往生する人。

三には、天性慳貪にして、施を行ずること無しといえども、仏像経巻を供養することを好んで、称名念仏して往生する人。

四には、年来他の為に慈無く、物の為に悲無く、他人を誹謗することを好んで、無益無利の言を吐て、念仏の勤めを致さざれども、命終の時に臨んであるいは自ら発心しあるいは他の勧めに依ってたちまちに信心を発して念仏して往生する人。

五には、心に凶無しといえども、身に悪無しといえども、二世の事をも思慮する所無く、名利の事にも染著する所無くして、徒らに日夜を送り迎えて、空しく一生を送る者、臨終に忽然として、念仏して往生する人。

六には、名聞を求め利養を求めて、朝市に趨るといえども、念を極楽に係け、隙に当って称名して往生する人。

七には、霊地の結縁を好んで、念仏して往生する人。

八には、修善を勧進するを本と為して念仏して往生する人。

九には、聴聞を本と為して、念仏して往生する人。

十には、塔寺を建立し仏菩薩の像を図造して、念仏して往生する人。

十一には、独り念仏を行じて、往生する人。

十二には、ともに念仏を行じて、往生する人。

十三には、別時の念仏を行ずることを好んで、往生する人。これに就いてその五有り。

一には、誓って尽形、臥せずして、往生する人。

二には、毎年に、あるいは百日九十日行じて、往生する人。

三には、毎月行じて、往生する人。

四には、毎日臨終講式を行じて、往生する人。

五には、毎時に十二光礼して、往生する人。
十四には、閑室に在って、念仏して往生する人。
十五には、形像に向って、念仏して往生する人。
十六には、形像に向はずといえども、遥かに西に向って、称名して往生する人。

末代の衆生を、往生極楽の機に、あてて見るに、行少なしとても疑うべからず、一念十念、足りぬべし。罪人なりとても疑うべからず。罪根深きをも嫌はずと云えり。時下りたればとても、疑うべからず。法滅已後の衆生、なお往生すべし。いわんや近来をや。我が身悪しとても、疑うべからず。自身はこれ煩悩を、具せる凡夫なりと云えり。十方に浄土多けれども、西方を欣うは、十悪五逆の衆生生るるが故なり。諸仏の中に弥陀に帰し奉るは、三念五念に至るまで、自ら来りて迎え給うが故に。諸行の中に念仏を用いるは、彼の仏の本願なるが故に。今弥陀の本願に乗じて、往生しなんには、願として成ぜずと云う事、有るべからず。本願に乗ずる事は、ただ信心の深きによるべし。受け難き人身を受けて、遇い難き本願に遇いて、発し難き道心を発して、離れ難き輪回の里を離れて、生れ難き浄土に往生せん事は、悦びが中の喜びなり。罪は十悪五逆の者も、なお生ると信じて、少罪をも犯さじと思うべし。

罪人なお生る、何にいわんや善人をや。行は一念十念空しからずと信じて、無間に修すべし。一念なお生る、何にいわんや多念をや。阿弥陀仏は、不取正覚の詞を成就して、現に彼の国に坐せば、定んで命終らん時には、来迎し給はんずらん。釈尊は善きかな我が教えに随いて生死を離れなんと知見し給うらん。六方の諸仏は悦ばしきかな我等が証誠を信じて、不退の浄土に生ぜんと、喜び給うらん。天に仰ぎ地に伏して悦ぶべし、今度弥陀の本願に逢える事を。行住坐臥にも報ずべし、かの仏恩を。憑みてもなお憑むべきは乃至十念の詞。信じてもなお信ずべきは、必得往生の文なり。

（異筆）一考　酉誉花押
宣誉花押